

## 多文化クラスにおける遠隔コミュニケーションの活用

アンダーソン睦 (東京学芸大学附属国際中等教育学校)

### 1. 学校教育の国際化のなかでの遠隔コミュニケーション

近年、インターネット環境の充実とともにICT (Information and Communications Technology) 教育が普及し、学習動画などの教材のデジタル化や、移動を伴わずに教育を提供できる遠隔授業が注目されている。遠隔地とのコミュニケーションの需要は、近年推進されている教育の国際化を背景に学校現場へも広がり、特に2013年6月以降のグローバル人材育成を目標とした国際バカロレア教育プログラム<sup>1)</sup>の開発・導入に伴い、遠隔地間の双方向授業や個人・社会的な交流の機会が増加している。本研究では、こうした学校教育の変化をふまえ、遠隔コミュニケーションにおける日本語運用の特徴的な点を指摘し、日本語教育への活用の可能性を考える。

### 2. 遠隔コミュニケーションの特徴

1990年以降、数多く蓄積されているCMC(Computer Mediated Communication)研究の中でも、言語的分析に焦点を当てたものは未だ少ない。直接対面せずに画面を通してやり取りを行う遠隔コミュニケーションは、日本語使用に加え相手と非同期環境であるという制度的特徴があり、コミュニケーション能力の育成や学習者の言語的特徴の再考に役立つ可能性がある(尹、2004)。

遠隔場面のコミュニケーションに見られる特徴は、機材の接続、インターネット速度、カメラ性能など、離れている場所を繋ぐ際の技術的要因に起因することが多い。日本語における遠隔会話を分析した福永他(1993)は、ビデオ会議システムを介したコミュニケーションの円滑な意思疎通を阻害する要因として、

画面の画質や大きさの問題、画面の閉塞性、空間の非共有、視線の不一致、距離感と物理的接触の欠如の5点を指摘した。本研究では、言語学習において重要な音声における課題を加え、視覚要因(画質や映像のずれ等の技術的な制約)、環境要因(空間の非共有等の物理的距離に起因する制約)、音声要因(音声のずれやハウリング、接続不良等の音声的な制約)の3要因とし、海外日本語教育機関との遠隔会話をを行った生徒による内省資料をもとに、遠隔コミュニケーションの課題を考察する。

### 3. 調査概要

対象とする資料は、海外大学機関の日本語専攻クラスと日本国内の高等学校の多文化クラス<sup>2)</sup>を接続した多者間遠隔会話である。海外接続先は、フランス(日本側7名・仏側4名、時差8時間)及びイギリス(日側3名・英側3名/日側4名・英側3名、時差9時間)であり、会話開始まで互いに関する情報は共有しない初対面接触場面とした。実施においては、海外参加者は日本の現在や学校教育を知る機会、国内参加者は海外での就学の情報を共有することを参加の動機とした。なお接続方法は、遠隔コミュニケーションの方法として汎用性の高いSkypeを使用した。海外接続前には校内の別教室間を繋いだ模擬遠隔会話を実施しており、模擬・本調査実施後に、会話参加者の内省を自由記述により記録、回収した。

### 4. 結果と考察

#### 4.1 遠隔コミュニケーションの課題

表1は、模擬会話と海外との遠隔会話後に行った振り返りの記述を3要因に分類した結果である。分類の結果、各内省は視覚・環境・音声といった調査設定に起因する外因的要因

と、参加者の心理的側面に起因する内因的要因に分かれた。

表 1 生徒の内省からみる遠隔コミュニケーションの課題

		模擬後	調査後
外因的要因	視覚要因	22	19
	環境要因	6	26
	音声要因	22	32
内因的要因		10	45
計		60	122

(表内数は内省コメント数)

模擬会話実施後の内省では、校内の別教室を接続したことから環境要因に対する課題は少なく、対面会話との違いを視覚、音声から捉えている。一方、フランス・イギリスとの遠隔会話実施後には、環境要因を指摘する内省が増え、初対面の会話構築として内因的要因も増加している。

視覚要因においては、複数の話者が同時に画面に映るため話者が特定できないことや「日本人は頷いたり笑うことが多く、フランス人は無表情で聞いている」という言語行動の違いを指摘する参加者もいた。また音声要因は、聞こえづらいといった感覚的な指摘だけではなく、話題提示のタイミングやターン（発話順）のバランス、臨場感の欠如などの課題へと結びついている。こうした語用論的意識の向上を促す可能性を持つ遠隔接触場面は、あいづちや視線、間（ま）など、教材化しにくい言語運用を特徴づけるやりとりとしても活用できる。参加者同士が物理的に離れているという点から、非言語コミュニケーションが強調・多用され、学習者自身が必要性を感じながら習得する機会となりうるだろう。

#### 4.2 遠隔コミュニケーションの意義

生徒内省においては「遠くの人とも同じ「時間」を共有できる。」「私はアイルランドに住んでいたのですが、英国で人気のテレビ番組のことを聞いてコミュニケーションを図ることができた。」と、遠隔会話の利便性や参加生徒自身の言語経験と結び付けてその意義を捉える者も多い。Kramersch (1993) は社会学的観点

から、学習は個々の学習者が学ぶ過程ではなく、周囲とのインタラクションによって知識が創造されるなかで主体的に学ばれると述べる。言語教育における遠隔コミュニケーションの活用は、母文化の言語使用規範と異なる新たなコミュニティや文脈と接し、学習者が自分なりの学びを創造できる場（言語的接点）として効果的となる可能性がある。

#### 5. 子どもの日本語教育への応用へ向けて

生徒の内省記述より、遠隔コミュニケーションは、海外環境に接点を持つ日本語話者にとって語用論的知識の獲得やアイデンティティの構築に役立つ可能性がある。学校教育の中で取り入れるには、相手の国の時差と授業時程を考慮する必要があるが、物理的・経済的な制約を飛び越えた学習の場として、今後有用な学習環境の一つとなるだろう。

注

- 1) 国際バカロレア機構が提供する教育プログラムであり、初等教育から各国での大学入学資格である国際バカロレア (Diploma) 取得まで、世界 140 以上の国・地域、4,211 校において実施されている。
- 2) 会話参加者 (延べ 14 名) のうち海外在住経験者は 11 名、留学経験者は 1 名。調査は高校 3 年生「国語表現」の授業内活動において実施。

#### 【引用文献】

- 福永厚・渡辺理・勝山恒男 (1993) 「テレビ会議コミュニケーションの評価」『Human Interface』29-36.
- 尹智鉉 (2004) 「遠隔接触場面における調整軌道—ビデオ会議システムを用いた日本語教育の試み—」『日本語教育』123, 17-26.
- Kramersch, C. (1993) Context and culture in language teaching. Oxford University Press.